



「カサブランカ」 絵/文 白澤 恵舟

花の園芸大百科の頁に「結婚式に欠かせない華やかな大輪の芳香種」と書かれていました。  
バラと共に若い二人に門出を祝う花、結婚おめでとう。  
いついつまでも、この慶き日をわすれずに。

## 第8代会長 村岡淑郎新会長が就任

昭和15年9月 秋田県生

昭和39年、村岡建設工業株式会社  
入社。昭和42年から同社代表取締役を  
務める。

同じく昭和42年から社団法人由利  
建設業協会 理事、昭和62年に副会長、  
平成5年に会長。

社団法人秋田県建設業協会におい  
ては、昭和42年から理事、平成5年か  
ら常務理事、平成8年から副会長を務  
め、平成23年5月25日の第79回定時  
総会において第8代会長に就任。

主な民間歴  
昭和48年～ 葵工業株式会社 代表取締役  
昭和57年～ 株式会社 ホテルアイリス 代表取締役  
昭和58年～ 株式会社 横山碎石 代表取締役  
平成13年～ 鳥海プラント株式会社 代表取締役会長

主な団体歴  
昭和63年～ 由利建設技術懇話会 会長  
平成4年～ 由利農林土木建設業協会 相談役  
秋田県本荘由利建設事業協同組合連合会 常務理事  
建設業労働災害防止協会秋田県支部由利分会 分会長  
平成5年～ 東北建設業協会連合会 理事  
平成8年～ 秋田県土木施工管理技士会 副会長  
平成10年～ 秋田県商工会連合会 会長  
秋田県火災共済協同組合 理事長  
平成12年～ 秋田県建設業厚生年金基金 理事長  
平成17年～ 由利本荘商工会 会長  
社団法人由利本荘市シルバー人材センター 顧問  
由利本荘市観光協会 会長  
平成18年～ 由利本荘市建設業協会 相談役  
平成19年～ 秋田県森林土木建設業協議会 会長  
平成20年～ 秋田県公共工事事品質確保・安全施工協議会 副会長  
平成22年～ 建設業労働災害防止協会秋田県支部 副支部長



新会長

村岡淑郎

(むらおか よしお)

# 表彰式・第79回定時総会

## 村岡淑郎会長就任、新副会長に加藤憲成・菅良弘常務理事

県協会は5月25日(水)、秋田キャッスルホテルにおいて表彰式並びに第79回定時総会を開催した。

総会に先立って行われた表彰式では、(社)秋田県建設業協会表彰において会員企業15社、会員企業の従業員27名を表彰。(社)全国建設業協会表彰では企業役員の特功功労として5名、会員企業1社、会員企業の従業員8名、事務局職員1名が表彰を受けた。

第79回定時総会は表彰式に続いて開催、会員 名が出席。来賓には瀬戸下伸介秋田河川国道事務所長、富田耕司秋田県建設交通部長が出席。

菅原会長は冒頭の式辞、今年3月の東日本大震災に触れ、自ら被災しながらも地域復興に尽力する地域建設

業者に対する敬意を表し、復旧・復興にあたって中心的な役割を担うのは、やはり地域の建設業であること、協会が東北地方の一員としての強い絆をもって組織的に復旧・復興支援を行うことを述べた。また、中長期的な取り組みとして、将来の東北地方全体の連携を念頭に置いた復興を東北六県建設業協会並びに各経済団体等と緊密な連携を図り強く訴えていくことを表明し、会員の協力を求めた。

最後、菅原会長は今総会をもって会長職を辞職することを表明し、平成13年からの四期十年にわたる会員、関係者の支援・協力で謝辞を述べ、挨拶を締めくくった。

議事は菅原会長が議長を務め、議案として▽平成22年度事業報告並びに収支決算▽平成23年度事業計画並びに収支予算(案)▽任期満了に伴う役員改選を上程。

役員改選においては、各支部より推薦の理事就任と村岡新会長の就任が決定したほか、総会中に理事会を開催し、北林一成副会長が再任、加藤憲成、菅良弘両常務理事が副会長に就任。専務理事に荒川英俊事務局長の就任が決定した。なお、総会終了後の懇親会席上において、村岡新会長から菅原前会長へ名誉会長称号記が贈呈された。

また、平成23年度の新会員として(株)住建トレーディング(工藤源聖社長)の入会が承認、総会の席上で紹介が行われた。

役員は次の通り。



|      |           |           |
|------|-----------|-----------|
| 会 長  | 村岡 淑郎     |           |
| 副会長  | 北林 一成     | 加藤 憲成     |
|      | 菅 良弘      |           |
| 専務理事 | 荒川 英俊 (新) |           |
| 常務理事 | 村木 通良     | 大森三四郎     |
|      | 佐藤 吉博     | 齊藤 實 (新)  |
| 理 事  | 八重樫 學     | 葛西 秀正 (新) |
|      | 鈴木 泚士     | 佐藤 清忠     |
|      | 澤口美恵子 (新) | 丸山 満夫 (新) |
|      | 伊藤与四郎     | 能登 信一     |
|      | 小玉 茂隆     | 加藤 義光     |
|      | 伊藤 久一     | 武田 鋭彦     |
|      | 山岡緑三郎     | 岡部 茂      |
|      | 三浦 稔 (新)  | 菅原 廣悦 (新) |
|      | 大沼 武且     | 小川 邦則     |
|      | 木内 了      | 橋本 一康     |
|      | 田中 恒雄 (新) | 小原 庸補 (新) |
|      | 仲野谷藤吾     | 荒川 暉也     |
|      | 中澤 昭晃     | 木村 孝 (新)  |
|      | 武茂 広行 (新) | 吉田 博行     |
|      | 高橋 俊一     | 柴田 均      |
|      | 山脇 成吉     |           |
| 監 事  | 米村 茂 (新)  | 畠山順太郎 (新) |
|      | 高嶋 伸夫 (新) | 舛屋 成一     |

# 秋田水風景

文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター  
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他  
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル  
写真塾・写案 主宰／写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.23

## 五能線小入川鉄橋

【このうせん・こいりかわてつきょう】

八峰町八森



ようやく東北新幹線も青森まで全通し、今年の東北（特に北東北）は、例年にない観光ブームが沸き上がるはずであった。その矢先の大震災、そして原発事故であり、東北の観光経済、生活者の一人ひとりが、大きな打撃を受けた。

線路に直接的な被害を受けた太平洋側の線区と違って、日本海側の鉄道の被害は軽微なもので、列車は走らせようと思えばいくらでも走らせられそうであったけれども、物流が途絶えたためにディーゼルカーに積む燃料も手配できなくなり、長い期間運休せざるを得なくなったのである。

地域の人たちの生活の足が奪われ、域外からは旅行したくてもできない状態が続いた。秋田と青森の日本海沿いを走る五能線は、JR東日本管内でも有数の観光路線だ。特別に製造された車両を使って観光列車を走らせ、専用のパンフレットも大量に配布されている。鉄道会社や地元の方の入れようが分か

るし、実際の需要も旺盛ということなのだろう。

その五能線をはじめ、東北地方の鉄道路線のほとんどが運行を再開できたのは喜ばしいことだが、一方で、五能線とは反対側の太平洋沿岸を走る三セクの三陸鉄道は、津波で甚大な被害を受けて、鉄道としての存続自体が危ぶまれている。

海沿いを走る鉄道にはロマンがあり、車窓の眺めは旅人の心を癒すが、大きなリスクを内包していることも忘れてはならないだろう。五能線でも、昭和40年代に、波打ち際に走る区間で路盤が波にさらわれ蒸気機関車が転覆するという事故が起きている。今は少しでも風が強いと用心して運休にするという措置がとられていて、安全には相当の神経が配られているようだが。

願わくば自然はこれ以上私たちを苦しめることなく、その深い懐で、私たちを癒し続ける存在であってほしい。

### 青年会

## 第30回定時総会

### 大沼会長再任、新副会長に菊地、吉田両理事

6月3日、秋田県建設青年協議会は秋田ビューホテルで第30回定時総会を開会し、会員45名が出席した。

総会は冒頭、東日本大震災の物故者に対する黙祷から始まり、続いて登壇した大沼会長は この度の震災に触れ、日本全体として構造の在り方を問われており、被害に遭った太平洋側だけでなく、日本海側の国土軸をしっかりと整備する必要があると述べた。また、「われわれは、これまで逆風の中インフラ整備の必要性を訴えてきたが、主張が受け入れられる風潮になってきた。心を新たに運営していきたい」とあいさつした。

議事では大沼会長を議長に平成22年度事業報告・決算、平成23年度事業計画・予算(案)の審議が行われ、原案通り承認・決定され、また、任期満了に伴う役員改選については役員会における承認内容が報告され、新役員の紹介が行われた。

新役員は次の通り。

|      |                 |             |
|------|-----------------|-------------|
| 会長   | 大沼 武彦 (由 利)     | 株式会社 大沼組    |
| 副会長  | 菊地 建一 (北秋田)     | 平和建設株式会社    |
|      | 吉田 昌平 (平 鹿)     | 株式会社 吉田建設   |
| 理事   | (新) 柳沢 義生 (鹿 角) | 株式会社 柳沢建設   |
|      | (新) 田口 勉 (鹿 角)  | 株式会社 田口産業   |
|      | (新) 佐藤 吉保 (北秋田) | 佐藤吉株式会社     |
|      | 加賀屋 篤 (秋 田)     | 株式会社 加賀屋組   |
|      | 清水 隆成 (秋 田)     | 株式会社 清水組    |
|      | 橋本 聡 (由 利)      | 菊地建設株式会社    |
|      | 藤嶋 文人 (仙 北)     | 株式会社 藤嶋建設   |
|      | (新) 小原 貴 (仙 北)  | 秋田振興建設株式会社  |
|      | 藤井 亮 (平 鹿)      | 藤井建設株式会社    |
|      | 高嶋雄一郎 (雄 勝)     | 株式会社 高嶋組    |
|      | 藤田 直哉 (雄 勝)     | 山品工業株式会社    |
| 監事   | (新) 佐々木創太 (秋 田) | むつみ造園土木株式会社 |
|      | (新) 高橋 司 (平 鹿)  | 株式会社 高作     |
| 事務局長 | (新) 山科 優 (由 利)  | 山科建設株式会社    |

### 県協会

## 人事異動

平成23年5月25日

事務局長 → 専務理事 荒川英俊

平成23年6月1日

事務局長 (新任) 鈴木 隆

(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

## 孤高の人

酢屋 潔

孤高の人の表題を見て読者は哲学者か行者のような人を想像されるでしょうが私がこれから書こうとしているのは登山家、加藤文太郎のことである。彼の名は少しでも登山をかじった人や郷里兵庫県の人には知っているだろうが一般には余り知られていない。

彼は兵庫県新温泉町浜坂出身で加藤岩太郎とよねの四男として生を受ける。

大正八年に浜坂尋常高等小学校卒業、神戸の内燃機製造所(三菱重工業の前身)に勤務し、県立工業校夜間部を卒業する。彼の勤務態度はなかなか真面目であり上司からも評判がよかった。当時の彼の住まいは須磨にあったので六甲山が歩いて登れる位置にあったことと生来の山好きと相まって彼の登山熱は急速に高まった。又彼の上司の遠山三郎という人がいろいろ登山のことを教えてくれたことが彼の登山熱に火をつけた。

彼は歩くのが非常に速く当時としては珍しい六甲山縦走をやりとげた。彼は早朝に須磨を出て六甲全山を縦走し、宝塚に下山した後、その日のうちに又歩いて須磨に帰って来たという。その距離は約百キロメートルになったという。我々にマラソンの走るのを見て長い距離だと思っただが山を登って下って百キロメートルとは正に驚異的なことである。

大正から昭和初期にかけての登山は今の登山と違い特権階級のものであった。装備や山行自体に多額の金額がかかった。又ガイドを雇うことも必要だったので特権階級のスポーツとされ、主として大学の山岳部の人達により行われていた。その中で加藤文太郎はありあわせのナツパ服の服装で登山靴をもたないので地下足袋をはいて山に登った。いつも単独行で地下足袋をいつもはいていた。

昭和三年頃から専ら単独行で日本アルプスの数々の峰に積雪中の単独登頂を果たしたが、なかでも槍ヶ岳冬季単独登頂や富山県から長野県への北アルプス単独縦走によって「単独登攀の加藤」「不死身の加藤」として一躍有名になった。

昭和十年、浜坂出身の花子と結婚する。結婚してからはしばらく登山は自粛していたが昭和十一年一月、彼を慕って彼の後に続き単独行を重ねてきた吉田富久と共に槍ヶ岳北鎌尾根に挑むが猛吹雪に遭い天上沢で生涯を閉じた。

当時の新聞は「国宝的山の猛者、槍ヶ岳で遭難」と報じた。

以上は加藤文太郎の略歴である。

ここで付け加えておきたいのは加藤文太郎の勤務態度である。山登りの為、有給休暇を取っていたので普段は早朝出勤、残業をした。特筆すべきはディーゼル機関の爆発の提案であった。

新田二郎の文から抜粋すると、  
「このアイデアのヒントは」「吹雪の雪洞の中で思いつきま

した」

加藤は、鉛筆で雪洞の絵を書いて、そのときのことを説明した。

「いつしか吹雪がやんで、外に出ると丸い月が出ていました」「加藤君、君のアイデアはすばらしい。天才的着想といってもよい。しかも実現性のある考えだ。ディーゼル機関の将来に新機軸を与えるものであるといってもいい」

立木海軍技師はそこで言葉を切って、「これを実用化するには更に綿密な設計と実験がいる」と言った。

この提案により彼は若くして技師に推薦された。

技師と言えは大学を卒業した人でなければ当時はなれなかったのに小学校出の加藤文太郎の若くしての技師就任は当時としては破格のものだった。

さて、話を登山に戻すと、彼が遭難にあい命を落としたことに対し色んな論評が述べられている。

七日から始まった二人の搜索では北鎌倉と槍の穂の間、天上沢側の雪底の下に雪洞の痕と甘納豆の缶などを発見、再び槍に戻って行くアイゼンの痕が槍の穂の直下で消えていたことなどから、千丈沢側に滑落したという結論を出した。そうして二人を探し出せないまま十七日で搜索は打ち切られた。二人の遺体が発見されたのは北鎌尾根の末端、P2直下の天上沢側であった。

この遭難について最も影響の強かったのはやはり、新田二郎の「孤高の人」だったろう。この小説では文太郎が余り気が進まなかったのに吉田富久の強引なすすめにより参加したことになるが、之に対し反論もある。遭難の二十七年後夫を失った加藤花子さんの思い出話がある。

最後の登山に吉田様と約束が出来てからは、登山の準備に余念がありませんでした。彼は山男の美しい友情についてよく話していました。彼の遭難後しみじみとその言葉を身をもって体験させて頂きました。

加藤夫人が吉田様を恨んでいる、というようなことだけは文面からしてもなさそうだ。

それどころか彼女は「山男の美しい友情」とか「山友達」とかを強調している。だから新田二郎の小説「孤高の人」のように、気が進まないが強引な勧誘により参加したことはなさそうだ。山友達を強調することが「単独行」とそぐわないという話は、単独行をあまりにも強調したことにならないだろうか。

人はなぜ山に登る、という声に「そこに山があるからだ」という言葉は余りにも奇知のある、うがった言葉ではないか。

私は研ぎ澄まされた達成感の中に山登りの魅力の一端が見えるような気がする。